

米山梅吉記念館 館報

2006
(平成18年)

春

Vol. 7



記念館屋上からの富士山

山頂に雪を頂いた富士山は、古今東西時代を越えて日本人はもちろん世界の人々に愛される風景になっています。この象徴的な雄姿が実際にはっきり見える日は冬場の早朝、年間20日足らずといわれています。記念館のある第2620地区(静岡・山梨)の私たちは幸いにもこの富士山の懐に抱かれて日々生活しています。現在、富士山を世界遺産に、という運動も盛んに論議されています。

当館屋上からは上掲写真のような富士山を仰ぎ見ることができます。ご来館の折にはぜひ屋上まで足を伸ばしていただき、この清々しい風景をご覧いただきたいと思います。

富士山と共にみなさまのお越しをお待ちしております。



財団法人 米山梅吉記念館

館報第7号発行に際して

理事長 内藤成雄



全国のロータリーアンの皆様、米山梅吉記念館では、歳入で年間のご支援を感謝し本年のご挨拶を申し上げます。

今年は昔情の乱れに加えて天候まで厳寒、北陸、東北の大雪等ただならぬ状態が続きませんが如何にお過ごしですか、その地域の皆様にはさぞかし大変のことと存じます。

米山梅吉記念館もおかげさまで順調な運営を続けております。全国的な規模で会員が減少する状況にもかかわらず、館において移動例会を行うクラブも増え朝来館者数は前年より増えています。

平成17年度の館創立35周年行事を終り、秋の例祭では「還ろう 米山梅吉の原点に」と題して特別のシンポジウムを開きました。パネリストに米山記念奨学会の宮崎専務理事と谷内監事、坂本館顧問をお願いしました。本号にその内容は載せてありますので御覧下さいたいのですが、昨今ロータリー界にただよう何とない行きづまり、曲り角、マンネリ感に對して「困った時には原点に還ろう。ロータリーなら米山精神に還ろう。」を意図したものでした。米山記念奨学会も規模、目的を超えて御協力を限り申味の濃いシンポジウムになったと思っております。この結果が同じ感を得たいと全国のロータリーアンの間、課題の解決の一助になれば幸いです。

私の文学というより人生観の師匠に故新田次郎先生がおります。そのご二男藤原正彦さんがこの館『国家の品格』という本を書いて贈ってくれました。この父にしてこの子あり、誠に同様の語が萌え、鼓舞され、本当に日本がこの通りになったなら、日本は救われるだろうと思っております。経済改革の柱となった市場原理のみがまかり通る日本、論理と合理ですべてを片付け、風潮に身を売った日本、改革すべてが改善と曲違ひする政治、社会、文化、全方面での意識低下、金銭至上主義にとりつかれ、マネーゲー

ムとして財力にまかせた法律違反すれすれ（実際に胆を挫かしてしまった）のメディア買収を専らとも下品とも思わなくなってきた日本、祖国への誇りや自信を失うように教育され、すっかり足腰の弱ってしまった日本、このように品格を失った国家を救うのは世界に誇る我が國古来の「情」と「徳」を取り戻すことだ、と正彦氏は訴えています。さらにこの本の基本には新藤戸稲造の「武士道」精神が充ちみちております。この精神は慈悲、誠実、忍耐、正義、勇気、信頼、名譽を重んじ取を知る心、「ものあわれ」を知る情緒に要約されます。幸いこの本がベストセラーになっていくであろう。この考えに共鳴の方が多いためか少し盛んでいます。館報のたまりにはふさわしくなくいようですが、私はこの考えは米山梅吉精神とも一如に繋がっていると思うし、館発行の『超我の人 米山梅吉の遺言』資料編の米山語録にもこの考えは随所に見ることができまう。今ロータリーが原点に還るということはもういうことではないかと考えられます。

館の目的は米山梅吉の遺言を継ぐことです。その一つに米山翁の三井報恩会の業績があります。大変大きな遺言です。来る4月の例祭にはその面をすこし刻削しようと計画しています。講師は三井報恩会のごに最もくわいしい谷内安文氏をお願いいたしました。この機会に多くの皆様にご参加いただき、更に情報を頂くようお願いいたします。

おかげさまで願望とは申せ館運営はすべて全国のロータリーアンの善意の御寄附によります。基本的な資金の外に賛助会費、全国への年間1人100円募金運動、周年行事ご寄附等にたよらざるを得ないのが現状です。厳しい冬が終り館の春は近いのです。何卒館への移動例会を含む企画をおたてになり御来館をお待ちしております。

創立記念祭

内藤成雄 理事長

米山奨学会理事長 島津久厚 氏

- 日時 2005年9月17日(土)
- 会場 朝米山梅吉記念館ホール

- 例祭及び轟勢
- 特別シンポジウム

「還ろう 米山梅吉の原点に」

- パネラー

朝ロータリー米山記念奨学会
専務理事 宮崎 幸雄 氏
朝ロータリー米山記念奨学会
監 事 谷内 安文 氏
(元三井報恩会副会長)

朝米山梅吉記念館
副 館 坂本 豊美 氏

- コーディネーター
朝米山梅吉記念館
理事長 内藤 成雄

- アトラクション
音楽会 オーボエ：中村 多恵さん
ピアノ：丸尾真紀子さん
チエロ：高木 愛子さん

- 観 覧 金



館崎幸雄 氏 谷内安文 氏 坂本豊美 氏



音楽会 中村多恵さん 丸尾真紀子さん 高木愛子さん

うという運動が始まったのです。法人組織を作る、お金を集める、建物を建てる、大変な事業でした、そして月日が流れました。

私が理事長になりました年には創立50周年を迎えました。50年経って建物が老朽化してき、また皆さん大勢に来ていただき、もう少し大きなホールが欲しいという声に、私はこのまま我慢していいのか、と考えました。ロータリークラブのシンボルともいえる米山記念館です。このまま35年、40年放置しておいていいのか、幹線の第一、第二、第三分区のクラブ会長に集まっていたとき、私の考えていることを申し上げました。みなさんまったくその通りです。しかし、できないうちから後者の運営がどうする、経費は？などという厳しい意見をいただきました。

そういう状況の時、翌年が米山さんの50回忌にあたり、日本にロータリークラブができて75年、米山記念館ができて50年という記念すべきことが3つ重なるということは誠にありえない時がきました。当時のガバナ―内藤さんがガバナ―として私のこのことを聞いてくれ、ガバナ―会へ第二記念館建設の請願書をだした。ところがそのときは与えられた時間が5分、あまりしゃべれなかった。しかし、帰って色々々な反響がありました。

内藤理事長 今、お三方のお話を聞いていると米山様が実現した事業という言葉がわかるような気がします。

宮内氏 2年前、地区大会である方がシカゴから帰ってきて「ポール・ハリスの記念館が人手に渡ろうとしている、一度あそこに行きポール・ハリスの生家を訪ね、みなさん、あれを買いますよ」と言われた。私は利川が地区大会に参加していますが、初めてブーイングがおこりました。その後「日本には米山南吉の記念館があるじゃないか、日本のロータリーが世界の中でアイデンティティを示すことができないという事です。先程宮内さんのお話の中で和魂洋才まさに米山南吉は翻訳でもなく輸入したのでもなく、西洋の華北の精神とならぶsacrifice above selfの心を融合させた、華北の精神とならぶsacrifice above selfの心を融合させた、これを立証するものとして青山学院本部を忘れない、これを立証するものとして青山学院本部には米山南吉の像があり、その下に書かれている「何事もしてほしいと思わぬ人は人々にそれをお返しせよnot to be serve but to serve」梅吉翁が私たちに伝えようとした華北の真実の言葉です。

ウエスレアン大学のヘルマン・ハリスは、キリスト教が解明になった最初にアメリカのメソジストから教道された宣教師であり、自分の生涯を日本の福島の教員のために費やさんと書け、その行為により日本政府より勲章を与えられた福島の宣教師です。サンフランシスコで20歳の時に梅吉翁に会うわけです、福音

会に集合した日本人の中でその青年を本多謙一が非常に印象深くし、ウエスレアン大学の教授でありましたハリスに紹介して、オハイオ州ウエスレアン大学に米山南吉が入学する。そこで哲学を勉強し論文を書いて山南吉が入学する。私のこの次の前題はオハイオに行っています。私のこの次の前題を見つけたかと思っていきました。もう一つは、米山の青年時代の夢がなかなかつかめない、あれだけ文才に長けた米山青年が書いたであろう日記がないのです。どこかで米山の青年期の日記が手に入れば、青年期の実績が呼びあびあびあつてくると思われます。

この生誕の事「何事も人がして欲しいと思はざれば人々にそのとどりにせよ」といふまきに思いやりし、朝露で行った社会奉仕、当時社の中に捨てられた人たちのところに自分から赴いて行って親善会のお金を渡して結婚予備金、あるいはハンセン氏病など科学校舎の助成をしていきますが、そこで交際した人たちが書いたものの中に、米山南吉が出てきます。社が心から出してくれた資金がいかにか感謝で喜んで入る人を聞けたか、汗をかく事をした人でありました。自己を超越した奉仕というのにはありえない、ということを書いていますが、自己を超越した事、我々の常識では考えられないことを超越してやっただのが米山南吉である。その精神を私には受け継いでいるのだから自分たちで考えなければならぬ。そうでなければ自分sacrifice above self 超越の事「他」という言葉がロータリーの中心をなすものであるという自覚と意識が生まれてこないと思います。

最初に申しましたように、米山奨学会の台湾あるいは韓国の若者たちが学んだものは何かというときに米山南吉の精神、すなわち出会いを大切に華北の心をもつてやっただけということ、奨学金をもらうことによって得たのだということ、私にははもう一度ロータリーとして考えなければならぬと思います。

宮内氏 3年前に記念祭に坂本先生に声をかけていただいて卓話をさせていただいたのが「三人の情」で、その時お話しした本が、7月によりやってきました。米山さんにはたくさん人の像があるのですが、米山さんが社に出るまで、出るとき、そして華北活動に入るまで、それを代表する相方という相方が舞伴作りの人としてお父さんの和信、三井銀行で同僚でありライバルであった池田成徳、そしてポール・ハリスの三人を語ることによって、米山さんの一生を再現できているのではないかと。この本の構想もそれをふくらませるような形でできあがりました。

今日でもう一つ考えてきましたことは、三人の節という事です。西園、次郎、太郎という三人の人が米山さんの生涯で非常に重要な舞台返しをします。藤田四郎（井上肇の娘婿）の紹介で三井銀行に入ります。三井銀行に入る時採用したのが中上川彦次郎（お母さ

人が中国流古の味にあたる人、そして日買回南太郎（藤田の娘婿、後に朝鮮政府の財政監査官、専修大学創設）なんですね、日買回南太郎のアメリカ派遣の政府の委員でなく、米山さんは単に三井銀行の経営者ではなく、政界財界へ選ばれるわけではなく、特になる人はポイント、ポイントに選ばれていく機嫌であったか、一層一會というか、こういう人たちがいて米山さんの舞台を華やかにしていると思えます。

最後に原点に帰るということでお話しますが、今のロータリークラブはマンネリ化して、若い会員と古い会員がなかなかうまくいかないということがあります。ロータリーを論じたときと同じように、これが正しいロータリークラブであるということはないかと思えます。今私が感じておられるのは、もっとクラブの自立的運営を考へるべきではないかと。なんとなくR.I.からいわれていることをただ消化して、それをもって足りている形になってしまっているクラブが現実には多い、と警鐘を鳴らしています。

それから原点と試うことからいいますと、クラブは林間を作ることで原点だろうと感じていますが、いかがでしょうか。親交と華北をどう組み合わせるか、新会員たちに受け止められているのはロータリーに入ると、華北、華北ばかり聞かされる、と、明日、新会員研修をやられるわけですが、ポール・ハリスはなぜロータリークラブを世につけたかという「寂しいから」と言った事ですが、その道な観点と考へてみる必要があるのではと思います。

坂本氏 先程の続きですが、記念館がどうしてできたかお金の話をしたいと思っています。全国から寄付をいただいています。大口は米山奨学会から5000万、東京ロータリーから2000万、そしてありがたいことに兵庫駅から2000万、全国から35,500万くらい、これだけのお金が集まったことで建ちました。

運賃をいってたらよいのかという疑問をもちます。内藤理事長ともよく話しますが、私はやはり米山奨学会と米山記念館とは密接な関係をもって運営していただきたい。米山奨学会は年間、000人の奨学生に奨学金をだしているわけですが、先程の米山さんの思想、やっつけられたことを奨学生に伝えるチャンスがないと思います。ですから奨学生にここへ来ていただき、今のようなお話を聞いていただければ、奨学生に米山さんの思想を伝えられること。

それから新しい人たちがロータリーをあまり勉強しないといいますが、本を渡さないということですが、ここへ来ていただければ、日本のロータリーの空気がわかるような場面にしたい、今まだ十分とはいえないかもしれません。しかし、そういう日開を持って米山の記念館

を運営していきたいと思えます。

今後地区の奨学会や記念館の役員になられたら、そのような一つの思想をもつて記念館を見ていただきたい。そしてこの記念館を活かしていただきたい。ただ、建物があつてというだけでなく、そこにどういう意味があるのかをロータリーに伝えていく機嫌であったか、もりたいと思います。

一番の問題は運営の資金です。将来この資金が安定するような方法を考へていきたい。米山さんの思想を活かして行き理解してもらいには、このように皆さんに集まっていたらいいと議論したり施設を利用してもらう、多くの方に参加してもらおうというシステムをつくる。皆さんの記念館であるという考へでやっていたらいいと思えます。

内藤理事長 記念館が研修のインスティテュート、教育的プログラムとしての考へると奨学会と館が抱えている課題間に共通項があるような気がします。

宮内氏 この施設は如何に使い、誰によって維持されるのか、これを建てる趣意をいかして維持し支援する人を集める。米山館が私運に勝つ、華北という無形無形のこれほど大きな公益公共事業に並した団体は少ないと思います。この事をもっと知らしめろと強くあり、こういう精神でこの館が建てられればロータリーだけのものではなく地域に奉仕をする施設であることを主張していくべきだと思います。米山館は内藤の精神であるといわれていますが、これを現代的に考へ奉仕を広く、ここは学習の場であることを知らしめていくべきであること、私達も奨学会の目的と使命を明らかにし訴えていかなければなりません。

宮内氏 ロータリーは昔米山月開や、米山功業者という言葉を通して「米山」という言葉をよく聞きまう。しかし実際には奨学会や記念館がどうあるかという事があまり知られていません。この本を借こうと思つたのは、米山さんを通して日本の音の人が何をやっただかを知ることが必要ではないかと思つたからで、米山さんにしても趣味的に奉仕が大半であるといふだけでなく、先人が何をやっただかを通して物事を議論し直さなければいけないのではないかと思っています。

内藤理事長 今日「原点に還ろう」といっていますが、それは原点とは何か、米山さんは自分を放り出して華北した人です。私達はレベルも力も満たしていますが、その意に迫ることで私達の抱える価値観と解が違えるのではないかと思えます。またここを研修の場として広めて行くべきだということも、今日のシンポジウムの大きな要りとして強く感じました。

取巻れない取合せである。グラント將軍は、アメリカ南北戦争の時の北軍の將であり、幾多勇名を挙げた。前軍のリー將軍との対陣など、戦後アメリカ国民の間で人気を博し、1869年3月から1877年3月まで2期8年、アメリカ大統領をつとめた。だが、任期満了が近づくとつれ、政權内部の汚職などで多くの批判をうけた。

グラントは、大統領の終った後、1877年(明治10)5月から2年間、世界周遊の旅に出かけた。日本にも、1879年(明治12)6月から2ヶ月半ほど国賓名みの待遇で滞在した。

米山がこのグラントに惚れた面影を述べたことがある。米山は、蘭軍艦を団長とする「英米訪米実業団」の一員として、アメリカに渡った。大正11年のことである。10月15日横浜を出発し、10月20日シアトルに着いた。そして、鉄道で東部に上がり、11月4日朝10時にシカゴに着いた。ホテルに着くと、奇しくも、首相府前降参の悲報が報込まれた。その日予定お取り日程をこなし、翌日も、ホテル・プラザ・ストンで、朝日の参社のた



1855年頃のグラント將軍 (『グラント將軍日本訪問記』より)

米山梅吉とグラント將軍

35周年記念誌編集委員 長

井口 賢明

(沼津北校)

め、日本製船所の晩餐会を行なった。

米山は、ここで、グラントの来日が日本国民に多くの感銘を与えたこと、グラントが日本のために助言したり多大な貢献をしたこと、グラントの来日を含め日本の信託関係は長い間重ねがあること、したがってアシントン軍艦会議も信託に基づいて民族全して敵しいなどの感銘を受けた(ちなみに、この訪問団は、折からの軍艦会議を刺激から援助するものでもあった)。そのついでに、自分が少年のころ、グラント將軍と出会ったことを語った(『英米訪問實業団』 日本工業振興会内 十一年會 大正04.25)。

予は「グラント」將軍に就き一つの小さな個人的理想を持つてゐる。それは將軍が帰国直前に入浴せられた折、山向ふの三島と呼ぶ町の町に御出でになられ、將軍と一緒に他にも紳士が認められたのであるが、十歳の少年は彼等が頭に着けてゐる奇妙なものを初めて見たことである。聞けばそれは「シルク・ハット」といふものであつた。今でも特別の名譽として想ひ起すことは、予が將軍の滞在になられた家で使者として將軍に近づきたる小学児童の一人であつたといふことで、かゝる貴顕には成る眼界以上に近寄ることは許されなかつたのであるが、將軍の凡ての人に對する親密な表情、柔和な態度は今日でも予の回想にのほり来るのである。

グラントの世界周遊には、夫人、子息のほか、求めに応じてジャーナリストのヤングが書記として同行した。そのヤングによる「グラント將軍の世界周遊記」があり、その日本の部分について、吾永孝賢「グラント將軍日本訪問記」(雄松堂書店 昭和58.02.25 新興図書 第11巻 9)がある。

このなかに「グラント將軍は船根をちよつと訪れ、富士山を取り巻く美談に見入った」という部分がある。グラントは、船根を訪れているのであるが、余り惚れしていない。記者の解説によれば、明治12年8月12日(夏



三島大社前 明治初期

(『みしま町』昭和15.02.16 三島市郷土資料館より)

京駅から8時半の汽車)で箱根宮ノ下に行き、8月13日も「箱根」に滞在したようである。ヤングは箱根で過ごした体験について詳らかにしていない。「おそらくグラント一行は数日滞在して帰京したものであろう」とする。

このように、ヤングの書物には、三島に来たことの記事がない。しかし、グラントは、8月16日三島に来て一泊し、翌17日早朝箱根に帰った。三島では、賓客グラントを迎える準備やそれを受けて、また折から三島大社の祭典とも重なり、てんやわんやの大騒動であった。新聞には「本朝(三島朝)開闢以来の賑わいならん」とある。

『静岡縣土産研究』(第7輯 昭和11.09.20)に、三島藩「グラント將軍の來朝と静西騒動」という論考がある。これは、主に当時の「静岡新聞」からその感銘を記述したものである。静岡県には、他に「兩日新聞」があり、これでも詳しく報道された。この発行は、御殿外という人の影響が強かった。静岡は、始まったばかりの静岡界会の議長(兼静岡新聞学校監事)であり、グラントを静岡県に招待しようとした中心的な人物で、その臺北接待委員であった(富士の郡界村に居住し、静岡県での自由民権運動の指導者)。以下二つの新聞から、グラント来島の様子を要約してみる。静岡県では、7月2日の次の静岡市訪問について、もう一度グラントを招待しようとした熱心に運動した。その結果、箱根訪問の折、グラントが三島に来ることが決まった。

接待所は、当時選定中であつた三島学校(小学校)が県下唯一の西洋式校舎であることから、これを接待所とすることに決めた。これに間に合ひよ

り竣工を急がせた。

グラントは、明治12年8月12日、汽車で新橋を出て、神奈川に着いた。ここからは、人力車である。途中、小田原に一泊し、翌日、箱根宮ノ下に向った。途中からは運搬であった。宮ノ下では、ふじやに逗留した。

当初、8月15日、三島に来る予定であつたが、16日になった。このため、作興の三島は大家であつた。干配した生の鮎が翌日までもつたりかとか、献上しようとした鮎がむけてしまふとむけてんでこ舞いであつた。

グラントは、16日朝4時30分宮ノ下を駕籠で出発し、箱根で朝食をとった。新田までは、夫人も一緒だったが、それからは、グラントと息子である。午後2時40分、三島の入口川原へ舟に着いた。ここには、三島学校の生徒約400人が出迎えた。グラントは、「流石船を載して善遊した。ここから、人力車に乗換えた。とりあへず宿泊所の本陣吉太夫太夫方で休憩し、三島大社に参加した。その後、校舎前の三島学校に向ひ、ここで夕食をとった。料理は、上野精養軒が平配した。

その夜、本陣に宿泊し、翌朝5時過ぎに箱根に向つた。今度は、朝馬であった。ちなみに、三島小学校ではグラント来朝にちなんで、朝いようとなく校舎の玄関をグラント玄関と呼んでゐた。これは、昭和35年、現在の市役所に建替えられるまであつたそうである。



三島小学校校舎 右がグラント玄関

(『みしま町』より)

ところで、記事には、三島小学校の生徒約400人が三島の入口、川原へ舟にグラントを迎えたことが出てくる。しかし、主任代表がグラントに謁見したことの記事はない。米山の演説にいう「將軍の滞在になられ

吉氏非難」(昭13.10.30 日本教育資料(自伝会)である。これについては、その巻の資料との関係で整合性を担保できない。何れかの機会に述べたい。



米山梅吉が最初に学問を学んだ新雪舎
 大家が新築なった後福清の学校なのか、宿舎となつた古本陣なのか定かでない。

米山の少年時代は多くがわからない。「米山梅吉傳」年表では、明治8年「映雪舎入学と推定」、明治12年「長兄和田宗次郎映雪舎教師として校舎向高住宅に住み和田家転居、映雪舎に於いて学習と助教、長兄村の利山家と養子縁組の話はじまる」、明治14年「福清中学校入学(長兄村米山家より通学)」とある。

すなわち、米山は、兄宗次郎が長兄村の映雪舎で教師をしていた。その間、三島から長兄の納米里という部屋(およそろく)にあった映雪舎に通っていた。その後、宗次郎が校舎向高住宅に住むようになり、一家はそこに移居し、映雪舎を終えた。そんなことか、米山家の日にとまり養子縁組の話となった、ということである。

この点、米山のシカゴにおける演説の内容やダウンが三島にきた状況の記事によれば、グラントが三島にきた明治12年8月には、米山は、長兄の講習会でなく、三島の小学校の生徒だったことになる。これを裏付ける資料に『三島市誌 下巻』(昭44.05.31)がある。これによれば、米山の兄宗次郎は、明治22年には、三島の小学校で教師をつとめていた。

『三島市誌』にあるように、公立三島小学校(小学校)の教師として、教員手続13名のなかに、米山の兄和田宗次郎の名前がみえる。米山も兄が三島の小学校で教師をやろうになり、映雪舎を移って、ここに通りようになつたのであろうか。

米山のシカゴにおける演説の内容は、米山の少年時代のことについて、一石を投ずるものである。なお、米山の幼少の頃のことを考えるについて、もう一つ参考とすべきものがある。高木秀男『米山梅

校舎は三島町の前年洪水を受けた田圃跡の地で、西側を川筋まで拡張して一、七五〇坪となった。校舎は正面二階建て、左右の両端は平屋造りの北面向き切平形である。総延坪数三六八坪で教室一二間、仮教室、教員室、宿直室、教員宿舎、小使室を一室を設け、校務社屋なること地下第一と称せられた。竣工費三、三七一円九六銭である。当時校長は吉原守雄で教員助手合わせて一三名、生徒数四八七、明治十二年の校費支出額は金一、四四三円二〇銭五厘である。

当時の教員を挙げると次の如くである。なお吉原守雄は明治十一年五月に校長に任命されている。

明治十二年公立三島小学校教員												
校長	吉原	守雄	月俸	七円五〇	副校長	青木	不動	五円	司書	伊達	盛雄	三円
教員	長江	八	三	五〇	教員	大田	藤次	五円	司書	和田	宗次郎	三円
三島	西合	八	四	〇	司書	藤岡	美次	五円	司書	伊達	盛雄	三円
校舎	よ	三	七	〇	司書	木村	つる	五円	司書	三島	宗次郎	三円

『三島市誌』下巻より

和田家のお墓と米山梅吉翁の生誕地

市居 嘉雄 (西宮 RC)



米山梅吉先生は私にとって学部は異なるものの、慶應義塾大学新聞研究室主任教授としてご指導いただいた恩師です。しかし、私が西宮RCに入会した昭和55年には先生は前年に亡くなっており、先生が梅吉翁の三男であることも東京南RCの会長をされたことなども存じませんでした。そうしたことなどについて、私は米山奨学会の事業や梅吉翁のことなどについて関心がありました。

梅吉翁は若い頃、和田家から米山家へ婿養子に入つた方です。実父和田竹造さんは大和国高取藩の江戸藩の武士でしたが、明治5年(1872)7月12日高取町で亡くなって、同町大字下土佐にある光明寺の墓地に埋葬された。と『伝記』の年表にあります。

それで、私は平成3年(1991)のお盆に行ってみました。近鉄南大阪線で履原神宮前から三つ目の高取山駅で下車、6〜7分程歩いたところに立派な光明寺がありました。

墓地は小高い所に段々古い墓が、平地には新しい墓が広がっています。古い墓は古くは刻まれた文字が殆ど判読できません。ちようど和歌前住の住職が通られたので尋ねますと、以前にもロータリー関係の方が来られたが、この寺は浄土宗で檀家の中に和田姓は無く、該当するよりな墓は知らぬとのことでした。しかも、十何年ほど前に黒縁墓を拝理したので、成いはその中に含まれていたかも知れないという話でした。

そこで電話帳を借りして、高取町内の和田姓の住所と電話番号を書き出し、ここぞと目星をつけた和田姓の方2軒に電話しました。1軒は以前にもロータリーの方から同様のことを尋ねられたことがあつたが、うちは代々和歌前住の和の初めに火事退去、帳が焼けてしまったので昔のことは判らないし、うちには浄土宗と違ひからとのことで、もう1軒も違いました。こういう結果で空しく渡

阪山から引揚げざるを得なかつたのです。その後、第288地区からの「米山詣で」に参加し米山記念館を訪れた際、歳回常務理事に和田家のお墓の件をお尋ねしました。すると翌年になって、幾田氏から「和田家のお墓は、もしかすると米山家のお墓がある鶴見の福寿寺の墓地へ、和田家が米山家の墓方かによって移されたかも知れません」とのお手紙を頂戴しました。鶴見へはまだ行っていません。

次の関心事は梅吉翁の生誕地はどこかということでした。「米山梅吉伝」には明治元年に芝田村町の高取藩江戸藩で生まれたとありますが、残念ながら著者の作家位々木邦氏の記述では田村屋敷や台田屋敷など周辺の描写が多くて、肝心の場所がはつきりしません。

そこで私は、その江戸屋敷がどこにあったのか、それが現在のどこに当たったかを突きとめてみようと思ひ立ちました。まず、田高取藩の家老後故を探し出したのを手始めに、『江戸藩政要覧』編纂の井上隆明氏(秋田縣大先輩)、新人物往來社や江戸東京博物館などに問い合わせさせて教えていただき、その中で東京町田サビビアRC小島政幸会員が資料を送って下さいました。

その結果、江戸時代末期から明治初期にかけて、高取藩の江戸藩政には上中下の屋敷があり、芝田村町に該当するのは中屋敷で214坪あったこと、そして当時の地名では芝愛宕下、のちに芝田村町6丁目となり、現在は新橋6丁目の一面にあることが判りました。(下図参照)

次に、その中屋敷跡が現在のどこに当たったかを特定する段階で、江戸時代の地図に現在の地図をかぶせた資料類の間には、南北に若干のズレがあるものの、およそその場所が把握できました。

それによりますと、今の「新橋赤レンガ通り」が昔の愛宕下大名小路と



こういふ結果で空しく渡

館展示の米山翁の書解説



昭和13年

秋の老翁石川翁の田舎を歩む

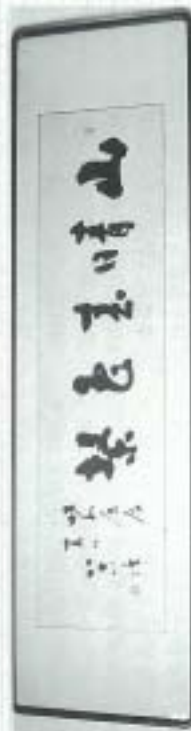
天地のめぐみは程にあまりありたくはせずと大人は判り

石川翁の書と太鼓者より故郷が用ひし杖一ちとを得ず

わがものと今日よりわがもの故に老翁がふりし杖と違ふよしもかな

明治の二宮尊徳と称された石川理起之助は、被解していた故郷秋田の農村経済に心血を注ぎその復興発展に尽力した。三井相恩会はこの石川の業績を賞え、「石川翁農道要義」という評伝を出版した。石川の残した莫大な量の蔵書、研究書は三井文庫という形で当地に保存されている。昔も一首の短歌は、米山が秋田に石川翁の足跡を訪ねた折りに詠んだ歌である。

石川理起之助 (1845～1915)
 (『石川翁農道要義』より)



山晴れて春色に紫く

(山口郡高がだんだんよくなって春のようになってきた)

昭和9年、三井相恩会は農村復興事業の一環として、青森県東津軽郡西平内村に毎年一万円の援助と新傳員を常駐することにより、この地域復興の一翼を担った。当時三井相恩会の理事長だった米山は自ら現地へ赴き、私財も投じて積極的に支援した。その努力が結実し村は復興、これを喜んだ米山が「山晴れて」を筆頭に、米山の功績に述べた。その後、遺族がこの副題の米久保存を願い、米山記念館に保存されることとなった。西平内村には、昭和15年、村民が感謝の気持ちを込めて書いた記念碑(米山碑)が建立されている。

ご入金 ご寄付のお願い

平成10年に完成した米山梅吉記念館新館の運営は皆様からの寄付により行われています。基本経費として米山奨学会や近隣地区によるご寄付、米館時のスマイルをはじめ周年事業寄付等様々な形でのご支援をいただいておりますが、主に2つの緊急運動によっています。まず一つに全国一人100円募金運動があります。これは「100円の短い糸が鎖と全国を結ぶ」を合い言葉に平成12年から始まった運動です。今年度上半期の入金状況は下表のようになっております。

全国100円募金入金表							平成17年7月～12月現在		
地区	RC番	地区	名	口座	地区	RC番	地区	名	口座
2900	08	北海道東部		1	2670	73	愛媛・香川・徳島・高知		7
2910	72	北海道西部		4	2680	74	兵庫		12
2920	90	岩手・宮城		1	2690	67	岡山・鳥取・島根		13
2930	63	徳島		3	2700	59	福岡・佐賀・長崎		5
2940	43	秋田		5	2710	74	広島・山口		11
2950	50	新潟		2	2720	75	熊本・大分		7
2960	56	新潟		3	2730	64	鹿児島・宮崎		2
2970	56	埼玉西北		3	2740	58	長崎・佐賀		2
2980	72	東京・神奈川		6	2750	90	京都・北摂・近畿・四国・九州		2
2990	63	神奈川		6	2760	80	愛知		10
2990	58	長野		4	2770	84	埼玉県東		10
2990	65	富山・石川		2	2780	69	神奈川県		6
2990	84	静岡・山梨		17	2790	85	千葉		13
2990	80	岐阜・三重		5	2900	57	山形		3
2990	76	大阪府南部・和歌山		0	2920	59	茨城		2
2990	94	福井・滋賀・京都・奈良		3	2930	43	青森		2
2990	86	大阪府北部		2	2940	47	群馬		2
RC総数				2324	口座合計	176口	合計金額	889,011円	

もう一つの運動に賛助会があります。これは自主的な善意によるもので、会費はお一人一口3000円です。今年度上半期は、93口273,000円の入金を頂きました。前年に比べると、少々苦戦中。賛助会にご入金していただくこと年2回発行の報章を個人的にお届けすることが出来ます。ぜひこの機会に賛助会にご入会ください。よろしくお願いいたします。

どちらの基金もクラブ単位、地区単位、個人いずれの形でもご入金でも結構です。

今後の報の発展運営に対する自発努力の必要性は関係者一同痛感している所ではございますが、叱咤激励と共に皆様のご理解ご協力をよろしくお願い申し上げます。

●申し込み、振り込み先
 郵便振替口座番号 00620-4-57730
 振込人 米山梅吉記念館

米山梅吉記念館春季例祭のお知らせ

日時 平成18年4月29日(祝) 午後2時～

場所 米山梅吉記念館

新館三島橋より タクシー5分 東名沼津ICより 自動車 30分

内容 演劇 講演 アトラクション 懇親会 「講演」谷内富文氏「米山梅吉と三井相恩会」

今年、明治後90年にあたります。講演者谷内富文氏はロータリー米山記念奨学会監事、『点描

米山梅吉』の著者です。元三井信託銀行の副社長をつとめられた谷内氏から三井信託の初代社長、

そしてロータリーアソシエーションの先輩としての梅吉翁について興味深いお話が聞けるものと思えます。

多くの皆様のご来館をお待ち申し上げます。

米山梅吉記念館より60分

天城山に佇む
米山梅吉翁ゆかりの宿
落合楼村上

伊豆天城湯ヶ島温泉

落合楼村上

〒410-0320 伊豆市湯ヶ島1887-1
電話 0555-885-0014

<http://www.ochiairou.com>

ご家族旅行、慰安旅行、などにもどうぞご利用ください。昼のご会食も承ります。

米山梅吉記念館のご案内

開館時間

午前10時～午後5時（但し11月～3月は
午後4時まで）

休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日



米山梅吉記念館報

Vol. 7

発行日 平成18年3月20日
 発行者 財団法人 米山梅吉記念館 理事長 内藤成雄
 〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
 印刷 フタバ印刷株式会社